

精神科医
奥寺 崇氏 (高校29期)

>> 泰山木と噴水と委員会室のあたり <<



中学生の時に体育祭を見る機会があり、何が何でも立川高校に進学したいと思った。その希望は叶い、授業はそっちのけで泰山木と噴水のあたりで暑いさなか毎日毎日キャンバスに糊をつけた新聞紙を貼り、エールの練習で奇声？をあげる日々となった。1年から新歓実行委員会と生徒会執行部に加わり、2年で体育祭のチーム団長として、噴水の池に投げ込まれる榮譽に浴し、3年では合唱祭のチーフを担った。体育祭のフィナーレのフォークダンスに憧れて入学したのに、毎年毎年フォークダンスがあることをすっかり忘れていて、いつも新鮮な感動を経験することができたのが懐かしい。

そのような3年間を送って、将来の進路についてはっきりとしたヴィジョンも持てないまま卒業したが、駿台予備校にも、一浪して入った早稲田大学にも立高の同期生は大勢いた。それはまだ、ゆりかごの中にいられたとも言えるだろうし、同時に、いつまでもそこにいるわけにもいかないということでもあった。政治経済学部で講義を受けながら一から進路について考え直し、自分には「ひと」へのあくなき関心があること、より深い理解と関わりを持つことが理想との自覚を頼りに、精神科医を志した。数学好きだったため文系のクラスにいても理系の数Ⅲをとっていたことが幸いして、医学部に入ることができた。入学した群馬大学の医学部には立高の同窓会もあった。

卒業後母校の大学病院で精神科医として思春期の患者を中心に関わりを続けるうち、縁あって米国 Menninger 病院の研究員となる機会があり、そこで精神分析に触れる機会があったことは、帰国後ロンドンの精神分析研究所へとさらなる留学の実現へとつながった。医学部の講師を辞し、2度目の帰国後、四半世紀ぶりに多摩に戻って小平市の国立精神神経センターを経て開業した今も、週5日みっちり診療する以外に、学術活動で内外の学会で発表し、専門家向けのセミナーの講師を務めるなど、充実した日々を送ることができている。

今は大人の患者を診る機会が多く、その多くがいわゆるトラウマ、つまり様々な形で心に傷を負った方々への関わりで占められている。人への不信、孤独、時には死が頭から離れない方々への関わりは、どれほど経験を重ね、修練を積んでも、この先ベテランの域に達することができたとしても七転八倒の日々であろう。振り返ると自分の感性、人間観、世界観など考え方の基本は立高生だったあの頃にある程度まで形成されていたのだった。それは、キャンバスのやぐらを支える丸太を立てるのに逆さ吊りになって穴を掘るとき、応援団で拳手の姿勢の練習に音をあげるとき、合唱祭を控えて眠い目をこすりながら朝練に向かうとき、炊き出しのおにぎりをほおぼるとき、そのときどきの瞬間に宿る「何か」であったり、あるいは委員会室でいつまでもだべっているときのとりとめない会話によって養われたものに違いない。